Judith Wright の詩と Australian Identity

Australian Identity in Judith Wright's Poems

(1997年4月2日受理)

橋 内 幸 子
Sachiko Hashiuchi

Key words: Judith Wright, Australian identity, nature poet

I. はじめに

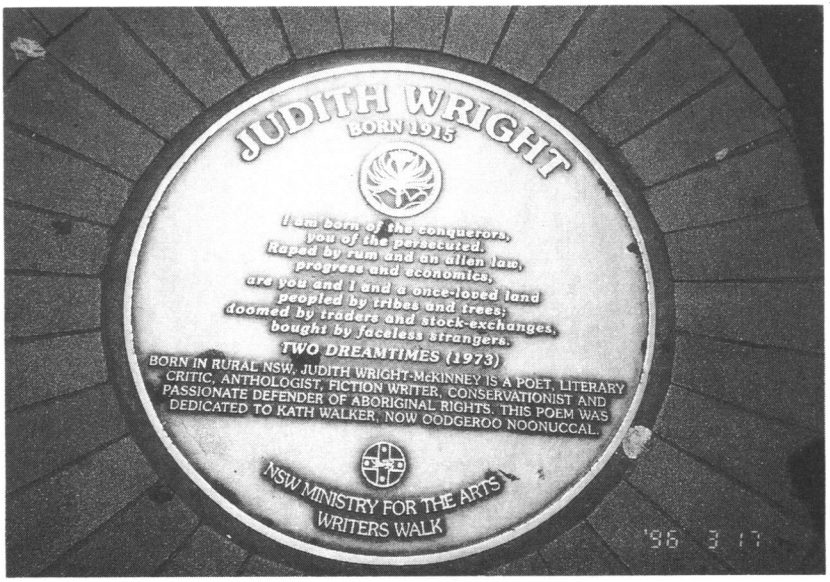
1788年，イギリスから囚人を乗せた第一次船隊が到着し，1901年にオーストラリア連邦が成立して約100年という歴史を背景にした現代作家や詩人たちは，自分たちのアイデンティティをいかに位置づけるのかという課題に向き合う。開拓の歴史にモティーフを見いだす者もいれば，自然やアボリジニの問題に人間性のテーマを重ね合わす者もいる。また，現代に生きるアーティストとして欧米の思想や芸術思潮も無視することもできない。従って，現代オーストラリアの詩人たちは，他の現代文明に生きる詩人たちとは異なったスタンスで，詩作を試みることが可能である。テーマや技法は重層的でありながら，彼らの主張は明確な輪郭を持つことが多い。

シドニー湾に臨むサーキュラー・キーからシドニー・オペラ・ハウスに至る歩道には，Writer's Walkと呼ばれる50ものブロンズの板が，間隔をおいて埋め込まれている。1991年から1994年にかけて，作られたものであるが，その上を歩く観光客はその存在にほとんど気が付かない。オーストラリアを代表する作家たちはもとより，この国を訪れ，関心を持った外国の文人たち，例えば，Mark Twain, D.H.Lawrence, Joseph Conradなどの作品の一部分も含まれている。その中の一つに以下のような一節を記したものがある。

I am born of the conquerors,
You of the persecuted.
Raped by rum and a alien law,
progress and economics,
Are you and I and a once-loved land
peopled by traders and stock-exchanges,

bought by faceless strangers.

TWO DREAMTIMES(1973)[1)]



これは，Dreaming（創世神話）の時代からこの地を生き抜いてきた原住民，アボリジニの女性に対して，移民の子として生きてきた人間が持った贖罪の想いを綴ったものである。土地や権利を力ずくで奪われ，自分たちとは異なる価値観のもとに抑圧されていったその歴史の断片を簡潔な詩行の言葉が的確に表している。アボリジニの権利の問題一つとっても，オーストラリアという国が，その風景のなかに詩人たちが詠み込める人間の問題を秘めている場所であることがわかる。

この詩の作者 Judith Wright（1915〜）も，オーストラリアの自然の中に，時とともに風化していくことのないテーマを幻視してきた詩人であるといえる。初期の開拓移民の第5世代であり，裕福な家庭の子女としてシドニー大学で学び，ヨーロッパ滞在の経験がある彼女も，このオーストラリアが持つ独自性を独創性への源泉に転化できた詩人である。Wright が現在までに発表した詩集は，*The Moving Image*(1946)，*Woman to Man*(1949)，*The Gateway*(1953)，*The Two Fires*(1955)，*Birds*(1962)，*Five Senses*(*The Forest*)(1963)，*The Other Half*(1966)，*Shadows*(1970)，*Alive*(1973)，*Fourth Quarter*(1976)，*Phantom Dwelling*(1985)である。そして，本稿では，この Judith Wright の詩にみられる Australian identity をたどることにする。

II. Nature poet としての Judith Wright

現代オーストラリア詩壇における Judith Wright の存在の大きさについては，彼女の詩がさまざまな詩人に及ぼした影響力の広がりによってもうかがい知ることもできよう。Geoff Page は，*A Reader's Guide to Contemporary Australian Poetry*(1995)の中で 'This would include what might

be called poets of landscape such as Robert Gray and feminist poets such as Kate Llewellyn, as well as many others in between'[2]と述べているように，詩のテーマや表現，主義主張が同時代の詩人たちに与えた影響は大きい。また，古今東西の女流詩人の作品を集めたアンソロジー，*The Penguin Book of Women Poets* の中でも，オーストラリアの詩人として唯一人取り上げられている。[3]

オーストラリアの自然は，地形を含む風景，動植物，季節の変化など，この国土に生きる詩人たちに他では見出せないほどの豊富な題材を提供し続けてきた。Judith Wright の場合も，この自然環境をそのまま写し取るのではなく，その中に人間の多様な面を投影させていることが多い。初期の詩集，*Woman to Man*(1949) と *The Gateway*(1953) には，オーストラリア原産の植物である flame－tree（fire－treeとも呼ばれるゴウシュウアオギリ。常緑樹で，花は鮮紅色で美しい）に因む詩が二篇収録されている。"The Flame－tree"の冒頭で，

> How to live, I said, as the flame－tree lives?
> know what the flame－tree knows; to be
> prodigal of my life as that wild tree
> and wear my passion so?[4]

一本の flame－tree を眺めた時に，大地に根付き，季節の移り変わりにも耐え，鮮やかな赤い花を咲かすという，その存在そのものが，この地に生きる人間（＝私）が持つべき叡知と生命力，そして情熱を体現していると感じる。「水や土，太陽から育った，恋人との結び目」，「理性をもっても解き難い問いへの簡単な答え」であり，自分の心とつながって，人生の知恵を示唆していることを詩人は理解する。

> How shall I thank you, who teach me how to wait
> in quietness for the hour to ask or give:
> to take and in taking bestow, in bestowing live:
> in the loss of myself, to find?
> This is the flame－tree;•••[5]

行動を起こす時をも心穏やかに待つこと，相反する行為が「生きる」うえで通底すること，そして自我を無くすことが自己を見出すことになる。Judith Wright が，flame－tree に刻むことを願った想いはこの樹を生み出した大地への賛歌であり，愛を以って共感の心を分かち合えた愛する者たちの感謝の念である。

しかし，この女流詩人が自己の心情を交えずに，この木をオーストラリアの厳しい自然に生きる人間のそばに置くとき，その様相は一変する。"Flame－tree in a Quarry"の中に描かれる

flame－tree には，「死者」，「つぶれた頭蓋骨」，「血」，「生きる亡霊」などの表現が連なっていく。

flesh of the world's delight,
voice of the world's desire,
I drink you with my sight
and I am filled with fire.

Out of the very wound
springs up this scarlet breath ——
this fountain of hot joy,
this living ghost of death. [6)]

露天の採石場に咲く flame－tree は，「裂けた大地」の口から太古の賛歌を歌い，その歌の化身になる。また，その鮮やかな花は大地の緋色の息吹きとなって，見る者を炎の感覚で満たし，たとえ枯れても時期が来れば咲く，つまり，出現する亡霊として，人間の網膜と記憶に定着する。これは，簡潔な表現の積み重ねでありながら，詩行に切迫した緊張感が走っている詩でもある。'I drink you with my sight'（「わが眼で飲み込み／私は炎で満たされる」）という感覚表現の不一致や，'this living ghost of death'（「この生ける亡霊」）などの oxymoron の技法なども，詩の内容をより重層的にしているからでもある。

地方のありふれた風景を，人類という視点とともに，オーストラリアの歴史を思い起こさせる手法で描いた詩が，*The Moving Image*(1946)に収められた "Nigger's Leap, New England"である。ニューサウスウェールズ州のニューイングランドで育った Judith Wright は，日没の前の黄昏の様子や，暗くなり始めた周囲の風景の中にさまざまなイメージを織り込む。ニューイングランドの台地に，東の空から夕闇が迫り，海から風に吹き寄せられる雲が船団をなすかのごとく近づく時，この地にやって来た移民たちに追われて，崖から身を踊らせて落下していったアボリジニたちの姿が浮かぶ。

Swallow the spine of range; be dark, O lonely air.
Make a cold quilt across the bone and skull
that screamed falling in flesh from the lipped cliff
and then were silent, waiting for the flies. [7)]

そして，暗闇が人間の視界から少しずつ見えるものを消していく時，自然の前では人間が築きあげてきた文明がいかに小さく弱いものかを実感する。人間たちは，「昼の長さを夜の時で，熱帯区域を極地で／愛をその終わりで，話したことを沈黙で／測らねばならない。」また，夜の暗さは，人

間たちの昏さにつながる。ヨーロッパから船で送り込まれた人間たちが，この地に根をはやすために先住民たち（black people）から土地を奪い，彼らを虐殺していったその歴史が大地に刻まれているからである。

Did we not know their blood channelled out rivers,
and the black dust our crops ate was their dust?
O all men are one man at last. We should have known
the night that tied up the cliffs and hid them
had the same question on its tongue for us. [8)]

強者が弱者のものを奪い，殺し，地上から抹殺しても，その記憶は強者の記憶の底に潜み，外界のものがその輪郭をおぼろげにしていく時に，悪夢のように甦る。肌の色こそ違え，同じ人類どうしが殺し合う。昔，風の中で，若木の影のように踊っていたアボリジニの子供たちの姿はもはや見られない。そして，「夜は，突然，洪水のように我々をのみ込む／はるか昔，平和な時代に多くの島が沈んでいったように。」

III. 二つの神話に生きる人間

白人が外海からやってくる前は，アボリジニたちの生きる土地として，独自の神話（Dreaming）の世界にとどまっていたこの大地に，囚人や移民が持ち込んだものも，海岸線から「奥地への開拓」という神話であった。ウルルを聖なる地として，虹の蛇による守護と支配を信じてきたアボリジニと，進歩と富への道を進んだ開拓民。土地を追われて，殺されていった者たちと，土地を奪い，その歴史を正当化した者たち。Judith Wright は，アボリジニの権利に対して，詩人としてのみならず，一白人として，その回復に努力したことはよく知られている。

1973年に発表された詩集，*Alive* に収録された詩，“Two Dreamtimes”には，この二つの神話をそれぞれ信じた者たちの子孫として，その悲しむべき結末を越えて手をつなぎたいという，詩人としての願いが込められている。アボリジニの女性，Kath Walkerの手で木の皮に描かれた創世神話を読み，肌の黒い子供たち（dark children）とは遊ぶことも禁じられた子供時代をも振り返って，白人たちの侵略の歴史が断罪される。

over the desert of red sand
came from your lost country
to where I stand with all my fathers,
their guilt and righteousness.

Over the rum your voice sang
the tales of an old people,
their dreaming burned, the place forgotten・・・
We too have lost our dreaming. [9)]

やがて，土地を奪った者も，他の者にその土地を巧妙に奪われ，資本主義の世界で精神的にも荒廃していく。お互いの死とともに，創世神話も開拓の神話も消えていくかもしれないが，「あなたの陽気な物語と悲しげな目への返礼に，私はこの一篇の詩を捧げたい」と結ばれている。

一方，開拓民が歩まねばならなかったその歴史も，開拓民自身の行動の正当化のゆえ，当然，神話化の傾向がみられる。1985年に刊行された *Phantom Dwelling* の中の "For a Pastoral Family" は六部構成の長詩（Ⅰ. To My Brothers　Ⅱ. To My Generation　Ⅲ. For Today　Ⅳ. Pastoral Lives　Ⅴ. Change　Ⅵ. Kinship）であるが，その冒頭の部分には，開拓民の歴史とその末裔の様子が示されている。オーストラリアのどの地域をとっても，海岸線の近くに都市や農地がある他は乾燥した内陸部が拡がる国土は，鉱物資源などの採掘などは別にして，開拓できる区域はある程度限定されていたといえる。初期の移民は，奥地の地理的条件も乗り越えて，土地の所有を目標に開拓を進めていった。しかし，世の習いとして，世代が下るにつれて，親から引き継いだ土地で保守化していった。昔，乗り回した馬たちもなかば野生化し，「年をとった同胞たちは，変化や都会の悪や政治を嫌って／自分たちの世代が引き継いだ人生を息子たちに渡したいと願っている。」むろん，その中にも首肯できない腐敗はある。しかし，それが利益に繋がっている時は話は別。そのうえで，「田舎の静寂や，丘や山の斜面に見出せる，ぜいたくさは，／土地所有者に対する銀行家の注意深い礼儀正しさも含めて／享受できる」と，皮肉も込めて描く。

These are owed
to the forerunners, men and women
who took over as if by right a century and a half
in an ancient difficult bush. [10)]

前の世代が，灌木の生い茂る荒れ地を耕し，所有権を主張していった姿も，透視図のように詩行に埋め込まれているが，やがては，土地の所有をめぐって，人間的とはほとんど言えない争いも付け加えている。だが，この広大な国の「食べられる植物の葉の先を，／(まるで小動物のように)かじった我らの親たちは，／土地と田舎の安穏さを残した。」

Our people who gnawed at the fringe
of the edible leaf of this country
left you a margin of action, a rural security,

and left to me
what serves as a base for poetry,
a doubtful song that has a dying fall. [11)]

親たちが，彼女に残したものは，「詩の源泉，／しかし，水の枯渇しかかった滝のある，あやしげな歌」であったが，善悪を越えて，人間の原初的な姿を見せてくれたといえる。

Ⅳ. Feminist poet としての Judith Wright

オーストラリアは，弱者の立場を守ることが，社会的にも法律的にも努力目標の一つとして，配慮され，時には，強者である白人男性にとって不平等に感じられるほどの結果が出ることがある。つまり，移民，高齢者，女性，身体障害者などにとって，生活しやすい国といえよう。とはいえ，1995年秋の総選挙で政権が自由党に移ってからは，社会福祉や教育予算が削られ，弱者への保護が多少薄まってきている。その中にあって，目に見えない差別が，女性たちの感受性を逆なでし，Gyg Ryan(1956～)の“If I had a Gun”のような攻撃的な詩が，女性たちの支持を受けているのである。「もし，銃があったら，／バルコニーから私に口笛を吹く男を撃ってやる」などに始まる攻撃対象としての男性像は，10を越える。

しかし，Judith Wright の Feminist としての姿勢は，時には女性としての自信があふれ，また，時には，溜め息まじりではあるが，ユーモアたっぷりに両性の違いを娘たちに物語ることにより，余裕のあるものにみえる。詩集 *Woman to Man*(1949) の中の“Woman to Child”の母親は，自己の暗闇の中から生まれてくる子供が，植物の種のように芽を出し，母親の身体を暖め，夢見るように流れている彼女の血（my dreaming blood）に依存しつつ，一つの世界を形成することを意識する。第二連では，その彼女の血の中で，宇宙の多くの星が瞬き，色鮮やかな鳥や魚が動く。移動しつつある大陸さえも浮かんでいる。誕生以前の子供は，母親の体内にいながら，母親の感覚を通じて，この世のあらゆるものとつながっている。深い井戸のような，母親の子宮の中にいて，そこから逃れ出ようとしつつ，逃れ得ない。そして，誕生の時がやってくる。

I wither and you break from me;
yet though you dance in living light
I am the earth, I am the root,
I am the stem that fed the fruit,
the link that joins you to the night. [12)]

「私こそ，おまえの大地，根っこ，／果実を育てた幹」という自信は，新しい生命をこの世に送り出した責任に裏打ちされて，揺るぎないものとなっている。母という役割は，女性としての人生の

一部分であるが，自己の人生を越えて，予測のつかない世界，つまり「夜」ともいうべき領域に，子供達を送り出す義務も負っている。

Judith Wright は，feminist として，声高に権利を主張する代わりに，男たちの硬直した生き方をより柔軟に，生きやすくさせることが，ひいては女たちの人生をも変えていくのではないかと考える。*The Other Half*(1966) にある一篇の詩，"Eve to Her Daughters" は，旧約聖書の楽園喪失以後の Adam と Eve の生活を，娘たち（現代の女たちも含まれる）に語る形式で展開される。エデンの園から追放されて，空腹を抱え，日々の糧を求めて働き，そばで子供たちがめそめそ泣くという生活。しかし，けっして不幸とは思わなかった。そんなに不満ではなかったから，Adam の後をついて行った。つまり，Eve は，「楽園追放の罪を甘んじて受けた。私の人生だったから。」(I Adapted myself to the punishment ; it was my life.) 楽園で，かごの鳥よろしく，神に支配されて生きるよりも，たとえ苦労しても，主体的に生きる方がおもしろいのではないか。しかし，Adam ときたら。楽園追放という侮辱にこだわり，エデンに住む者たちがしかけた陥穽やその後の仕打ちをくよくよ考えた。内省的に，自己の欠点を反省し，償いをせねばと思ったのだ。Eve の視点から，この詩は続く。

むろん，地上は不完全で，季節は変わるし，獲物の逃げ足は早い。彼は労働がいやで，私の料理まで不平を言う。でも，とにかく，彼は働き始めた。地上を，新しいエデンにするべく，セントラルヒーティング，家畜，収穫機，エスカレーター，冷蔵庫，近代的な通信網，息子の Abel と Cain の高等教育などに取りかかった。その過程で，機械や仕組みこそ，全てと信じた彼は，あらゆるものの解明へ精魂傾けた。しかし，神にまつわることは，解明できなかった。説明できないことは存在しないということだが，彼は納得しなかった。

> Yes, he got to the centre
> where nothing at all can be demonstrated.
> And clearly he doesn't exist; but he refuses
> to accept the conclusion.
> You see, he was always an egotist. [13)]

Eve にとって，Adam のやり方は，自己中心的であり，近代的設備に囲まれていて人一人の心が離れているよりも，原始的な洞穴での心通い合う生活の方が良かった。しかし，Eve は，同時に，娘たちにも警告する。おまえたちも，この私の欠点を引き継いでいるのだと。

> But you are my daughters, you inherit my own faults of character;
> you are submissive, following Adam
> even beyond existence.
> Faults of character have their own logic

and it always works out.
I observed this with Abel and Cain. [14]

女たちはいつも，従順で，男たちの後をついていった。女とはこうあるべきだという論理が，一人一人の個性を越えて，正当化されてきた。Eve は，結局，楽園喪失という寓話は，男女をひっくるめての欠点を明らかにするためのものではなかったのかと思い到る。少なくとも，このことが示されたのだから。しかし，このことを Adam に言っても無駄。「彼は，神の方を向いている，／欠点のない存在，従って，存在しないものに。」だからである。

V．神なき後の人間を見つめて

Judith Wright が，Eve の口を借りて「欠点のない存在，つまりは存在しないもの」とした神をめぐって，詩作するとしたら，それは，やはり，近代人としての視点，つまり，神による救済が望み得ない時代に生きる人間の視点から始めるであろう。事実，*The Oxford Book of Australian Religious Verse*(1994) に収められた Wright の詩は 9 篇であるが，最初に収録されているのは，"Eli, Eli" である。これは，キリストが十字架にかけられて，絶命する前に叫んだ言葉，'Eli, Eli, la' ma sabach－tha' ni?' (My God, my God, why hast thou forsaken me?) に由来するタイトルである。「わが神よ，わが神よ，どうして私をお見捨てになったのですか？」という言葉によっても明らかなように，神に見捨てられた人々の姿を，洪水のように流れる川におぼれていくイメージで描いたものである。この詩は，*Woman to Man*(1949) に収録されており，初期の詩に属する。

To see them go by drowning in the river ——
soldiers and elders drowning in the river,
the pitiful women drowning in the river,
the children's faces staring from the river ——
that was his cross, and not the cross they gave him. [15]

川におぼれて流されていくのは，比較的弱者とされるグループ，つまり，実戦で最初に犠牲になる兵士たち，哀れな女たち，子供たち，そして，キリストの十字架である。目に見えない魔法の杖を持ちながら，彼らを救い得ないこと，彼らが自力で這い上がる他は助からないこと，この事実は人々がキリストに負わせた傷よりもひどい痛手であった。彼が差し出す愛も信仰も，彼らは誰一人として受け取らず，彼を裏切ったからである。

He watched, and they were drowning in the river;

faces like sodden flowers in the river ——
faces of children moving in the river;
and all the while, he knew there was no river. [16]

彼らのおぼれていく姿，びしょぬれの花のようなその顔，子供たちの顔を見ていた彼は，その間じゅう，そこには川はなかったことがわかっていたのだ。救済の余地のない状況が，手の届かない川での溺死のように，切迫したテンポで述べられている。

しかし，およそ20年後に出された詩集，*Alive*(1973) の中の“Grace”では，突然，閃光のように啓示される恩寵を理解することがテーマとなっている。人間もひとたび年月を重ねて生きるうちに，若い頃には理解はおろか，否定しつづけたことがらを受け入れざるをえなくなることが多い。頭に霜を置くようになってからも，若輩の時のシニシズムを持ち続けられるのは，よほどのひねくれ者か，理性的すぎる人であろう。たとえ，キリストの血とされるワインを飲んでいたにしても，日々の生活はパンを得ることで過ぎる。それぞれの人生を越えて，啓示は突然，自分のありふれた人生をレーザー光線のように横切る。

it merely happens,
takes over the depth of flesh, the inward eye,
is there, then vanishes. Does not live or die,

because it occurs beyond the here and now,
positives, negatives, what we hope and are.
Not even being in love, or making love,
brings it. It plunges a sword from a dark star. [17]

突如現れ，内なる目としてそこにとどまり，やがて消えていく。ここ，そして今という時空や，肯定と否定，希望と現実の枠を超え，愛すらも無関係である。光を持たない星から，刃が突き刺さるように，人の魂に刻印される。そのような啓示は，名付けるとしたら，恩寵であるといえる。

Maybe there was once a word for it. Call it grace.
I have seen it, once or twice, through a human face. [18]

その恩寵を一，二度見ることができたのは，人間の顔を通じてであった。聖なる物にでもなく，聖書の言葉の中にでもなく，人の顔に浮かび上がる恩寵とは何か。それは，詩人が，自分の人生や，この世界を心底から肯定できた時に，遭遇した人間の顔であり，特定の他人の顔とは思われない。恩寵とは，つまるところ，この世での人生への祝福であり，その自覚の瞬間に訪れる至福の思いで

ある。

VI. 終 わ り に

Judith Wright は，以上見てきたように，詩人としても，初期のものから，最近の詩集に到るものまで，題材，テーマ，手法のいずれをとっても，オーストラリア特有のものから，現代詩人が共通に直面しているものにまでにわたっており，その幅広さには堂目するほかはない。それは，とりもなおさず，詩人としての長年の精進の成果を示すものであり，同時に二十世紀という危機の時代の証人になることでもある。

Wright が，まず，オーストラリアの自然を題材に，その鮮烈なイメージを形象化する方向で詩作を始めたことは，非常に有効なことであった。その特異な自然界の物質や風景に，オーストラリア国民ととして生きる証を，そして，現実の中に過去の歴史と遺産を提示させることに成功したのである。素直な自然賛歌の内容の場合もあれば，生きとし生けるものの宿命の投影としてとらえる時もある。しかし，なによりも歴史の中に埋もれていった名もない人々，しいたげられた人々の影がその詩行の間から浮かび出るよう，詩人は巧みに言葉を配置した。

また，たとえ，白人たちが十八世紀にやって来て，アボリジニの歴史に悲惨な状況を引き起こしたとはいえ，アボリジニの創世神話は，その白人たちの感性に影響を与えずにはおかなかった。と同時に，開拓民として，この未知の地に生きるためにも，自分たちにとっての大義名分の神話が必要であった。Wright は，その末裔として，オーストラリアの大地から生み出された神話に生きた人々のプロフィールを描くことも試みている。

そして，Judith Wright が，もし女性でなければ，その詩のテーマや技法は，現代文明の脆弱さをより鋭く糾弾するものであったものと考えられる。だが，彼女の女性としての感性は，次の世代や未来に少しでも希望を託す方向に向かったのである。内省的ではあるが，自信にあふれ，物事の核心を直感的に把握できる資質は，Feminist poet として，後輩たちの支持を受けたのも当然といえる。

しかし，神なき時代に生きる人間として，Wright は，キリスト教のヴィジョンをあえて使うことを試みた詩人でもあった。信仰なき時代の恐怖と不安，それでも恩寵としか名付けようのない一瞬の認識，といった相反するテーマは，従来の宗教詩人の作品にも見られる。しかし，背景として描かれている自然は，やはりオーストラリアならではのものであったりする。人間の力では統制できない自然の脅威，乾燥した大地，それでも生命の確かさを感じさせる動植物が，人間とは何かという命題を引き出すために使われている。

なお，本稿では，紙面の関係上，割愛せざるを得なかった側面の一つに，言語の可能性の探求がある。多くの現代詩人たちが意識し，苦闘の跡を詩の中に盛り込みつつ，その自国語をめぐる思索を詩行にも披露するという，いわゆる 'linguistic moment' については，次の機会に検討することにする。

Notes

1) Judith Wright, *Collected Poems*(Angus & Robertson, 1994), p.317.
2) Geoff Page, *A Reader's Guide to Contemporary Australian Poetry*(University of Queensland
3) Carol Cosman, Joan Keefe, Kathleen Weaver eds., *The Penguin Book of Women Poets*(Penguin Books, 1978), pp.379−81.
4) Judith Wright, *op cit.*, p.95.
5) *loc. cit.*
6) *Ibid.*, p.60.
7) *Ibid.*, p.15.
8) *Ibid.*, p.16.
9) *Ibid.*, p.316.
10) *Ibid.*, p.406.
11) *Loc. cit.*
12) *Ibid.*, p.29.
13) *Ibid.*, p.233.
14) *Ibid.*, p.234.
15) *Ibid.*, p.44.
16) *Ibid.*, p.45.
17) *Ibid.*, pp.331−32.
18) *Ibid.*, p.332.

Bibliography

1) Cosman, Carol et.al. eds. *The Penguin Book of Women Poets*, London : Penguin Books, 1978.
2) Gray, Robert & Geoffrey Lehmann eds. *Australian Poetry in the Twentieth Century*, Melbourne : Reed Books, 1991.
3) Hampton, Susan & Kate Llewellyn eds. *The Penguin Book of Australian Women Poets*, Ringwood : Penguin Books Australia, 1986.
4) Hart, Kevin ed. *The Oxford Book of Australian Religious Verse*, Melbourne : OUP, 1994.
5) Hergenhan, Laurie ed. *The Penguin New Literary History of Australia*, Ringwood : Penguin Books Australia, 1988.
6) Kane, Paul. *Australian Poetry : Romantic and Negativity*, Cambridge : CUP, 1996.
7) Leonard, John ed. *Contemporary Austsralian Poetry*, Knoxfield : Houghton Mifflin

Australia, 1990.

8) Page, Geoff. *A Reader's Guide to Contemporary Australian Poetry*, St Lucia : University of Queensland Press, 1995.

9) Tranter, John & Philip Mead eds. *The Penguin Book of Modern Austsralian Poetry*, Ringwood : Penguin Books Australia, 1991.

10) Walker, Shirley. *Flame and Shadow : A Study of Judith Wright's Poetry*, St Lucia : University of Queensland Press, 1991.

11) Wilde, William, et al.eds. *The Oxford Companion to Australian Literature*, 2nd edition Oxford : OUP, 1994.

12) Wright, Judith. *Collected Poems 1942—1985*, Aukland : Angus & Robertson ,1994.

13) Wright, Judith. *The Generations of Men*, Sydney : An Imprint Book, 1995.